



分子研を去るにあたり

鹿野 豊

東京大学 先端科学技術研究センター 量子情報理工学分野 特任准教授
(前 協奏分子システム研究センター 特任准教授 (若手独立フェロー))



松古今色無

しかの・ゆたか／2007年東京工業大学理学部卒業、2011年東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程修了、2011年より現在までチャップマン大学量子科学研究所准メンバー、2012年分子科学研究所若手独立フェロー (特任准教授)、2015年東京工業大学応用セラミック研究所客員准教授、2017年より現職。JST ERATO 中村巨視的量子機械プロジェクト研究推進主任が主業務。

「今、学問は変わり目」

分子研の新しい人事制度である若手独立フェローの発案者である大峯巖前所長の言葉です。無論、40年以上も続く伝統ある分子研も変わらなければならないという雰囲気が流れていたのではないかと思います。その中で、若手独立フェローは「新たな分子科学を切り拓く」という大きな目的のもと、2012年に私と石崎章仁さん (現分子研教授) が採用されました。

分子研に着任するまで量子物理の理論研究を専門としていた私にとって、伝統ある学問分野である分子科学は全くの門外漢でした。しかし、所内外の多くの研究者に様々な観点から多様な分子科学像を教えていただき、私自身の学問的視野を広げることが出来ました。中でも、同

僚の石崎さんには、複雑でかつダイナミックな自然現象を統計力学と量子力学を基軸にどのように捉えているのかという研究に対する考え方から、これまでにやってこなかった研究の方向性をどのように具現化していくか、そして、そのためにどう独立した研究室を運営するかの指針に至るまで、着任以後から毎日のように議論し続けていただきました。また、大峯前所長、川合眞紀所長をはじめ、多くの方々の尽力により徐々に若手独立フェローの制度が整えられていく中、若手研究者としてのキャリアのあり方を強く意識するようになりました。こうして5年の任期を終え、大学に教員として勤務してみると、毎日目まぐるしく変容していく学問情勢にただただ圧倒されるばかりで、これまでとは違う職務に慣れな

いながらも全うしているところです。このような機会をいただき、分子研時代を振り返ってみると、分子研が基礎的な学問をするための拠り所となっていることに気づかされました。今後、在任中に得た知識と知恵と経験を基に、自分自身のサイエンスを築き上げていくことが出来ればと思っています。

最後になりましたが、私のグループの秘書であった中根淳子さん、近藤直子さん、鈴木小百合さん、事務支援員の加藤真悠子さん、加茂恭子さんをはじめ、紙面の都合上お名前は割愛しますが、所内外の多くの方々の協力により、何とか最後まで鹿野グループとして存続させることが出来ました。この場を借りて感謝申し上げます。

東林 修平

慶應義塾大学薬学部 准教授
(前 協奏分子システム研究センター 助教)

豊かな岡崎

ひがしばやし・しゅうへい／1996年関西学院大学理学部卒、2002年慶應義塾大学大学院理工学研究科応用化学専攻博士課程修了、博士 (工学)。2001年6月慶應義塾大学理工学部応用化学科助手、2002年4月ハーバード大学博士研究員、2004年6月分子科学研究所助手、2017年4月より現職。

分子研の助教は6年を目途に転出することが推奨されているにも関わらず、13年もの長きに渡ってお世話になってしま

いました。非常に長く居たために私生活は大きく変化し、赴任時は独身でしたが、結婚して3人の子供にも恵まれまし



た。長子が小学校に上がる前に転出するものと思っていましたが、期待に反して子供2人が竜美丘小学校でお世話になりました。もっとも、長居したおかげで子育てに非常に恵まれた環境を持つ岡崎での生活を満喫することができました。官舎は古いながらも広くて陽当たりと風通しは良く、広い庭で子供たちは同年代の友達と毎日よく遊びました。官舎が研究所に非常に近いことから、一時帰宅して子供たちと一緒に夕飯を食べたり、お風呂に入ったりする時間が取れたことは贅沢なことだったと、子供たちとの時間が十分に取れない今は、惜しく感じます。愛知県、岡崎は、自然環境、食物、公共施設、教育、経済に恵まれた本当に良い土地で、子供たちも岡崎が大好きでした。やっと出所できたことは紛れもなく喜ばしいことであるものの、岡崎を去ることには残念な思いもあります。

公募で助手として採用されたにも関わらず、有機合成化学分野の研究者の私にとって分子研は未知の存在であり、全く予備知識がありませんでした。当初はアメリカの留学先と遜色ない整った設備と共に、休日かと勘違いするぐらいの人気の無さにも驚きました。所内の有機合成化学者の人数も少なく、グループの構成単位も小さかったことから、必然的に所内の他分野の研究者とも交流を深めました。結果的に、有機合成化学、生物有機化学分野しか知らなかった私にとって、分子研で得た最も大きな財産は、分野の垣根を超えた多くの仲間を得たことだと思います。共同研究で多くの先生方にも大変お世話になりました。櫻井先生の方針で、アジアを主とした延べ50名超の多くの外国人学生、研究者がグループに滞在し、交流を持ったことも貴重な経験です。

在籍した13年の個人的感想ではありますが、分子研の助教から大学の准教授への転出が年々困難になってきているように感じます。確固たるデータがあるわけではなく、分子研の主流ではない門外漢ですが、助教の在籍期間はより長く、年齢も高くなってきているように思います。個人の問題、責任も然ることながら、分子研の制度、環境に起因する部分も大きいと思います。内部昇格が無い制度の下、学生の少ない研究所においてPIグループの研究を支えている助教の転出、昇進が困難であることは、分子研の根幹に関わる問題ではないでしょうか。

分子研では本当に多くの方々に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げますと共に、今後も長いお付き合いをお願い致します。最後に、胴上げで見送って頂き、ありがとうございました。

黒井 邦巧

東北大学大学院薬学研究科 助教
(前 生命・錯体分子科学研究領域 IMSフェロー)

分子研と岡崎市の思い出

くろい・くにさと／2009年京都大学理学部卒、2015年京都大学大学院理学研究科化学専攻博士課程修了(博士(理学))、同年分子科学研究所、研究員(IMSフェロー)を経て、2017年1月より東北大学大学院薬学研究科、助教(現職)。



昨年末に、分子研より東北大学大学院薬学研究科の中林孝和教授の研究室に助教として転出いたしました。分子研には、分子研独自の博士研究員制度であるIMSフェローとして採用して頂き、生命・錯体分子科学研究領域の古谷准教授のもと研究を行ってまいりました。約1年半という短い期間でしたが、充実した時間を過ごすことができました。古谷グループは、生体分子に赤外分光法を用いた研究に特化した研究グループであり、高価な赤外分光機器が何台も置いてあることには大変驚きました。また、同時に分子研の研究設備の潤沢さも感じました。ここには赤

外分光法を用いて生体分子を研究するノウハウの蓄積があり、実験機器の取扱いや光学系の設計、得られる赤外スペクトルの解釈などを、みっちり教わることができました。「分子研は大学に比べて学生などの人数が少ないことが問題である」とよく言われていますが、そのお蔭(?)で古谷先生と近い距離感で接することができ、多くのことを得ることができたので、私の場合には幸いだったように思います。分子研に所属した年に、幸いにも科研費(研究活動スタート支援)が採択されたので、古谷研では自身の提案した研究テーマも持つことができました。その研究

テーマには特殊な装置(高圧セルホルダー)が必要だったのですが、そこで分子研の装置開発室に製作を依頼しました。分子研の装置開発室は素晴らしく、「こういった装置を作りたい」という具体的な提案があれば、短期間で高いクオリティの装置に仕上げてくれます。その装置は、私の転出先で今でも活躍中です。このような装置製作環境があることは、実験系、特に計測を主な生業とする研究者には大変恵まれた環境であると思います。

最後に研究以外のことも振り返って本稿を終わります。分子研のある岡崎市は緑豊かな街で、整備された広い公園がい

くつもあります。私が住んでいた家の前も田んぼで、夏には蛙の大合唱という状態でした。分子研に来た当初、生後半年だった息子と、週末は公園で蛙と一緒に探したりして遊びながら育児ができたのは良い思い出です。また、夏には分子研

の屋上に上がって花火鑑賞もさせてもらいました。今は、遠い東北の地に移ってしまいましたが、岡崎市と分子研に恋しさを感じる今日この頃です。短い期間でしたが、研究だけではなく、人生における重要なことも多く教えて下さりました

古谷先生、いつも細やかなケアをして下さいました古谷研究室のメンバーの方々、装置開発室の方々、秘書の清水さんを含めた事務の方々、分子研で親しくして頂いた方々を含め、関わった全ての方にこの場を借りて感謝申し上げます。

BOOK レビュー

Conjugated Objects: Developments, Synthesis, and Applications

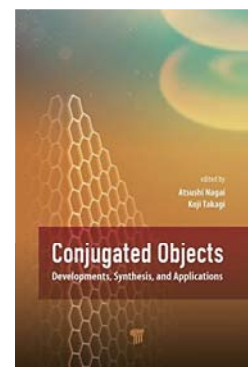
著書名 Atsushi Nagai (Institute For Molecular Science)

Koji Takagi (Nagoya Institute of Technology)

出版社 Pan Stanford

概要

Conjugated Objects: Development, Synthesis, and Application contains 17 chapters written by young researchers and contains current trends in π -conjugated systems for application in broad research areas such as design of unique π -conjugation, catalysts, self-assembly, charge transfer complexes, liquid crystals, supramolecules, and nanostructures by using conjugated small and/or macro-objects organically or electrochemically. The book can be used as a textbook of basic learning by undergraduate and graduate students of chemistry, electrical and electronics engineering, and materials science and by supramolecular researchers in nanotechnology and biotechnology.



覧古考新08 | 1985年

あれはいつのことであったか、昭和36年以前のことであることは確かである。小谷先生から一寸来て下さいなと言われてお伴したのが神田の学生会館、そこにおられたのが森野先生、赤松先生、長倉先生、たしか井口さんはおられなかったような気がする。そこで傍聴したのが物性研は固い物性の研究所だから、柔らかい物性の研究所を作ろうという計画の話だった。昭和39年秋に3年間の海外生活を終って北大に赴任した直後に分子研小委員会が作られ、それが間もなく学術会議の化研連の下にいわば公式な存在となって、分子研創設の計画が進められた。高エネルギー研という大物が前途をふさいでいてどうにもならなかった、苛立たしいしかし一方希望と期待に満ちた2-3年を経て、分子研の創設が決定する。同時に井口さんを室長とする創設準備室ができる。もっとも室員の数は室長を含めて三人位だったか。その頃から人事委員会なるものができて、学生会や、東京ステーションホテル、やがて古い図書館が一つしかなかった現岡崎国立共同研究機構の敷地でのその建物の中で何十回となく（そう感じられた）会議が開かれて、そのうちに分子研誕生。その分子研が誕生してもう今年は10周年を迎えようとしている。分子研小委員会から分子研誕生まで、私は何らかの形で創設の動きに関係していたようである。その分子研に2年間客員教官として在籍したということは、評点は落第であっても自分としては一種の感慨を持たざるを得ない。

井口さんからいただく年賀状に、例年のように「人は城、人は石垣、人は壕」という趣旨のことが書き添えられている。まことにその通りだと思う。いかに十分に研究設備が備い、費用が潤沢であっても良い研究者がいなければろくな研究は出来ない。良い研究者がいれば、たとえ設備が貧弱で費用が不足がちであっても（もちろん両方共よい条件であることに越したことはないが）良い研究は生れうるであろう。

今後も分子研外野応援団の一人として、分子研の確実な足どり、大きな飛躍をできるだけ長く眺めていきたいものだと念願している。

分子研レターズ No.13 「客員教官の任期を終るにあたって」(1985年)

大野公男（北海道大学教授）※

※ 2017年7月に逝去されました。永年温かく見守って下さりありがとうございました。